

■九州朝日放送番組審議会議事概要（10月分）

第607回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成30年10月15日(月) 午後3時25分～4時50分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	<p>委員総数 8名 出席委員数 6名</p> <p><b>(出席委員)</b> 野田 幸之輔 委員長 井手 雅春 委員 安恒 万記 委員 戸田 康一郎 委員 守田 有理子 委員 赤木 由美 委員</p> <p><b>(放送事業者側出席者名)</b> 代表取締役社長 和氣 靖 取締役 笹栗 哲朗 取締役総編成局長 森 君夫 報道局長 臼井 賢一郎 ラジオ局長 穴井 建一 報道局報道部長 柴田 高宏 報道部プロデューサー(副部長) 持留 英樹 報道部ディレクター 石田 大我</p> <p>番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長 井上 千秋 番組審議会事務局員(視聴者・広報室) 松永 俊郎</p>
議題	<p>議題 テレビ番組 テレメンタリー2018「それでも生きていく-九州豪雨から1年-」 放送日時：7月22日(日)午前5時50分～6時20分</p> <p>報告事項 1. 平成30年度上期の番組種別の公表報告 2. 平成30年10月・11月 ラジオ・テレビ番組編成状況 3. 平成30年9月 視聴者・聴取者応答状況 4. 次回 平成30年11月度(第608回) 審議会日程 11月19日(月)午後3時30分～開催 &lt;課題&gt; テレビ番組「サワダデース」 放送日時：9月10日(月)午前10時45分～11時40分 5. その他</p>
議事の概要	<p>◎委員の意見(概要)</p> <p>委員からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○今年に入り「西日本豪雨」など、「九州豪雨」を上回る規模の災害が発生したことにより、去年7月の災害がどこか遠のくような錯覚を受ける中で、番組は災害を風化させないために有意義な内容だった。</li> <li>○番組は被災した男性の1年を追う内容だったが、心の傷が癒えない遺族への取材は大変だったと思う。粘り強く取材を続ける記者に次第に親しみを覚える男性の様子はとても印象的だった。</li> <li>○記者の真摯な姿勢が男性の心を少しずつほぐしていく様子がよく伝わった。マスコミの取材が迷惑なだけの存在になってしまう心配もある中で、ひと時でも男性に笑顔をもたらす時間になれて良かった。</li> <li>○事件事故や犯罪被害者が自らの経験を教訓にして欲しいと語り出された時に、メディアがコンタクトを取り続けていなければ発信する術はない。こうした時こそ訓練を受けたプロのジャーナリストやメディアの出番であると思った。地域に密着したメディアの大切な役割だと感じた。</li> <li>○「将来がない」と語る男性の言葉からはやるせなさを感じたが、一方で何かのために生きる、誰かのために生きようとする人が持ち合わせた強さを感じた。被災者に限らず、様々な苦しみや悲しみに遭遇した場合に、人生をどう生きていけるのか、生きていくことの意味や術を教示してくれる素晴らしい番組だった。 などの評価を頂きました。</li> </ul> <p>また、気になる点や望むこととして、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○頑張っている男性は素晴らしいと思うし、その人柄に心を打たれたが、事実に基づいたドキュメンタリー番組に対して、何を言えいいのか分からなかった。番組が何を伝えたいのか分かりづらかった。</li> <li>○男性の方言がテロップで示される時に全て標準語にされていた部分は、伝わりやすさの面では標準語なのかもしれないが、発言のままでも良いのかなと感じた。</li> <li>○被災して間もない時期に、辛い経験をされた方に取材をすることが正しいのかどうか判断できなかった。もし自分が同じ立場だったらと考えると、心の痛みを感じないわけにはいかなかった。 などの評価や意見を頂きました。</li> </ul> <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○男性の姿から自分ももっと頑張らなければとの思いを抱かれた方も多かったのではないかと。そうした意味で、災害の特番と言うことを超えて、人が生きる意味や人間の逞しさ強さを描いた番組だったと思う。</li> <li>○男性の方言が全て標準語にされていた部分は、感情移入が中断されるかもしれないという番組制作上の難しさもあったが、全国ネットでの放送が決まっていた。どちらがより伝わるかということで、標準語を用いた。</li> <li>○被災者と遺族一人ひとりに寄り添いながらその生き様を描くことで、放送エリアに限らず番組を見ていただく全ての方に対し、被災地への眼差しや思いを馳せていただき、災害を風化させたくないとの思いで番組の制作にあたった。</li> <li>○1年是一个の節目ではあるが、九州豪雨の記憶が遠のく2年目が勝負になると男性も語っている。今後も被災地に通い続け、男性との関係性を維持し、継続的に取材したいと思っている。 などの説明をしました。</li> </ul>